

版木資料のデジタル・アーカイブについて

Digital Archiving for Japanese WoodBlock

金子 貴昭*

Resume:

筆者らは、奈良大学が保管する約 4,000 枚に及ぶ版木資料(近世～大正期)のデジタル・アーカイブ活動を行なっている。版木は当時の出版のありようを伝える貴重な資料であるが、従来、情報が十分に共有されておらず、資料的な扱いづらさも相まって、出版文化研究に十分活かされてきたとは言えないのが現状である。本稿では、版木のデジタル化手法を報告する他、情報共有に向けて現在進めている版木データベース構築の紹介を行ない、今後の課題についても述べる。

1. はじめに

筆者らは奈良大学が保管する約 4,000 枚に及ぶ版木資料のデジタル・アーカイブ構築のプロジェクトを進めている(代表：立命館大学文学部赤間亮教授。奈良大学文学部永井一彰教授との共同研究)。これらの版木の多くは竹苞書楼や藤井文政堂といった古書籍商から奈良大学に収蔵されたものである¹。前者は寛延 4 (1751)年に創業した佐々木惣四郎であり、後者は文政 (1818-1829)頃創業の山城屋佐兵衛であり、両者とも近世京都における有力な版元(出版元)であった。従って奈良大学に収蔵される版木コレクションは、単に多くの版木が集まる一大コレクションに留まらず、近世以来、版元が保管・利用してきたままの姿を伝える貴重なコレクションといえよう。内容的には、漢詩、伝記、随筆、和歌集、雑俳、狂詩狂文、有職故実など、ジャンルが多岐にわたっている。

2. 版木の形状

コレクションの版木の多くは、板の面積を最大限活用するため、表裏両面に版面を持っている。板の表 1 丁、裏 1 丁の 2 丁張の版木や 3 丁掛の版木など、形式は多様に存在するが、多くは表裏 2 丁掛、計 4 丁張の版木である。さらに版木が経年によって変形するのを防ぐために、両端に反り止めの板が装着されているものが見受けられる。4 丁張の版木の場合、図 1 のようにそのほとんどが左右 2 丁の天地が逆になっている。また丁付(ノンブル)に着目すると、表面から 1 4、裏面に 2 3 の順に彫られている例が多く見られ、摺りや製本の工程と関わりがあることが予想される。

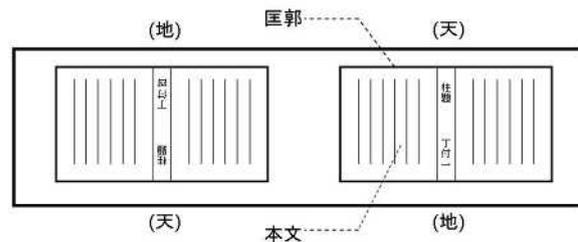


図 1 四丁張版木のイメージ図

3. なぜ版木は重要か

1 点の出版物を調査・研究しようとする際、そのスタートは、版本の諸版を集め、書誌学的に整理し、諸版を系統立てることに求められるであろう。そこでは、版面の善し悪し、改訂の有無、初版と覆刻の関係などの操作を見極めつつ整理を行なってゆく必要がある。しかし当然ながら、これらの操作は版本の上に行われた行為ではなく、版木の上に行われた行為であり、本来的には両者を吟味した上で研究を進めなければならない。この点の重要性については、永井一彰氏が明解に説いておられるため、その一部を引いておく²。

出版書肆や職人が何を考えていたかが板木には形として生々しく残っているのである。(中略) その情報を版本から得られる情報とつきあわせることによって、近世出版工房のありさまがかなり具体的に浮び上がってくるはずである。

しかし従来の出版文化研究は、版本を中心に研究が進められてきており、版木そのものは十分に注視されてこなかったと言わざるを得ない。

同時に版木の彫摺の技術は、現代徐々に失われ

*かねこ たかあき (立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程 / 独立行政法人日本学術振興会特別研究員 DC1)

原稿受理日：2008/11/1

てきている。もちろん現在も版木を用いた印刷は行われているが、必ずしも近世の技術がすべて現代に伝わっているわけではない。例えば、先の4丁張の版木の摺り方(特に順序)について、京都で活躍される彫師・摺師にご意見をうかがったが、はっきりとは分からないとの回答だった。現代の視点では、版木は印刷の道具というよりむしろ、伝統工芸品の域に達していると言うべきである。出版文化研究を行うにあたっては、彫摺の技術を解明していくことも重要な課題となってくる。

4. 版木およびその周辺から分かること

版木を出版文化研究に用いることで何が分かってくるのだろうか。以下、本章では永井一彰氏の研究に拠ってその具体例をあげてみる³。

4.1 2種類の題簽

一般に「同版本」とされる版本は、版木のバージョンが同一であることを指す。一方で版木のバージョンが同一であっても、文字や絵の輪郭の鋭さ・鈍さといった摺りの善し悪しから、摺った時期の先後が判断され、「初摺」であるとか「後摺」であるなどと言われる。これは版本の中身に限らず、表紙に貼られる摺り題簽(書名や巻名などを摺ったもの)についても同様であり、中身が同版同摺のように思われても、摺り題簽が若干異なれば、出版時期が異なると判断されがちである。

しかし図2にあげた狂詩集『勢多唐巴詩』の版木(奈良大学所蔵、資料番号 T1500、部分)には、書名のみを示した2種類の題簽が並べて彫られている。



図2

摺りの回数を半減させコストダウンが図られたのであろう。一見、左右の題簽はほぼ同じように見えるが、先頭の「勢」の字の匡郭からの距離や、右側に彫られた題簽右下の匡郭の欠けという明白な違いを見いだすことができ、この違いは摺られた題簽にもそのまま反映される。中身は同じであるが、異なる題簽を持つ版本『勢多唐巴詩』を書誌学的に整理しようとする時、もしこの版木を参照しなかったとしたら、本来同一バージョンである両者が、無用な別バージョンとして位置づけられてしまうかもしれない。

4.2 諸本の再整理

『大平楽府』は明和6(1769)年に刊行された狂詩集で、3巻1冊の書である。現在、奈良大学には2種類の『太平楽府』の版木が現存しており、これらの版木は、1章において紹介した竹苞書楼の版木であった。本来、版木は1種類あれば用をなすものであり、1つの版元が2種類の版木を持つことはありえない。しかし本件については、蔵版記録『竹苞楼大秘録』⁴によって2種の版木が現存する経緯が明らかとなる。以下、その記事によって2種の版木が伝存した経緯を簡易に記す。

- (1) 明和6年(1769)6月 『太平楽府』を丸屋善六と相版で刊行。(初刻)
- (2) 明和8年(1771)4月 版木を再刻(現存A版)。
- (3) 明和8年(1771)冬 田中屋半兵衛が海賊版(現存B版)を刊行。
- (4) 明和9年(1772)10月 佐々木惣四郎が田中屋と和談し、それぞれ正規版、海賊版の版木を持ち合い。
- (5) 安永4年(1775)3月 (4)の版木をそれぞれ1枚ずつ所持し、それ以外は返却。
- (6) 安永6年(1777)10月 田中屋死去。海賊版を含めた版木を全て竹苞楼が引き取る。



図3 『太平楽府』版木2種(部分)奈良大学所蔵 資料番号 T1898(左, A版), T1046(右, B版)

かくして正規の再刻本および海賊版の2種の版木が竹苞書楼に伝存した経緯が明らかとなる。

永井氏によれば、『太平楽府』の版本は計4種に分類することができるが、そのうち3種は浅川征一郎氏により、初刻本、再刻本、三刻本であると分類されてきた⁵。版木の現存状況と4種の版本の分類を照合すると、再刻された正規版の版木(A版)が現存するにもかかわらず、三刻本が存在するという矛盾が発生する点から、版本の分類の明らかな誤りに気付かされる。つまり、表1のよ

うな新分類に改訂することができるのである。

版木	版本	
	浅田説	新分類
初刻(現存せず)	初刻本	初版
再刻(現存A版)	再刻本	再刻
海賊版(現存せず)	三刻本	海賊版
海賊版(現存B版)	-	海賊版

表 1

以上 2 例のみによっても明らかのように、版木を研究資源として用いることが、版本中心であった従来の出版文化研究に対して直接的に作用することは間違いない。またこうした版木事例研究の積み重ねを行えば、版木が現存しない出版物の研究において物事の想定を行う場合、参考に資することができるようになるだろう。

なお彫摺の技術説明という問題については、3 章でも少し触れたとおり、現在活躍されている彫師・摺師の方々に実際に版木を見ていただきながら、聞き取り調査を開始している。近世当時迫るには程遠いが、今夏の聞き取り調査⁶では、

- 1) 薬研(彫った痕跡)には意図的に角度差がつけてあり、それによって刷毛を引くときに墨が必要以上に溜まらないように彫られていること。
- 2) 1)の薬研の角度の方向によって、摺りの方向も想定できること。

などの貴重な情報を得ることができた。

4.3 なぜ版木は活用されてこなかったか

なぜ版木は十分に研究活用されてこなかったのだろうか。第 1 には、資料としての扱いづらさが考えられる。手にすれば分かることだが、和紙で摺られた軽量の版本に比べ、格段に重く、厚みもあって嵩高い。表面に墨も残存しており、閲覧すれば汚れることは間違いなく、また付いた汚れは簡単に落ちない。

版木は墨で摺られるため、浮世絵の色版を除き、多くの場合が黒一色であることから、一般的な白黒 2 値やグレースケールの複写を作ることにも困難であった。奈良大学では版木の拓本を取ることによって複写を作成されていたが、作業量は膨大である。拓本は紙媒体の資料であるため、その共有にもさらに手間がかかることにもなる。

第 2 には、版木に関する情報不足があげられる。奈良大学所蔵版木の中にも見られるが、不要になった版木はその表面が削られ、再利用される。ま

た近世以来、火事や戦災、震災などによって多くの版木が失われてきたことは事実であり、何かしら「版木はもうほとんど残っていない」という固定概念も存在するであろう。実際には参考に資するに十分な版木が現存しているにもかかわらず、どの作品の版木が現存しているのかといった情報以前に、版木がどこに所蔵されているかという情報が十分流通していない。場合によっては複数現存し、代用物が存在しうる版本とは異なり、版木は原則として 1 点しか存在しないはずである。ひとたび情報が途絶えると、目的の版木にたどりつけなくなる。

資料の扱いの困難さを克服し、研究資源の共有や活用を実現するためには、キーワードはやはり「デジタル」になるであろう。筆者らが版木資料のデジタル・アーカイブに取り組む所以であるが、中でも最難関である版木の複写資料作成については、5 章に述べるデジタル化手法によってクリアした。

5. デジタル化の方法

筆者らは 2007 年度中に、ライティング方法を中心に試行錯誤を重ねつつ、3 度のテストを行い、最終的なデジタル化実施にあたっては 2110 万画素のデジタル一眼レフカメラを用いた俯瞰撮影方法を採用した。このカメラの採用により、1 ショットにつき 1 丁ずつの版面を収めるに十分な画像解像度を得ることができ、4 丁張の版木の場合は片面 2 分割で撮影を進めることができた。

先に述べたように版木は大半が黒色であり、通常のライティングでは画像上に黒潰れが多く発生し、文字などの輪郭を明確に浮び上がらせることができない。幸い、版木に残存する墨には膠を混ぜてあるため、若干の光沢がある。この特性を利用し、被写体正面(カメラ側)からフラッシュ投光を行なうことにより、文字等の判読に用いる標準的な画像を得ることに成功した。しかしこの標準画像は、正面からフラッシュ投光を行なった結果として、フラットな印象の図像となる。入木(部分的な改訂)や部分的な欠損、あるいは細かな彫りの様子などを観察するためには、版面の凹凸をもっと浮び上がらせる必要がある。そのため、斜光ライティングを用いて版木表面の陰影を捉えることができるように工夫した。版木は凹凸の高

低差が大きい他、凹凸の方向も一定ではない。斜光によって伸びた影による黒潰れを防ぎ、入り組んだ凹凸を克明に捉えるため、4方向からの斜光ライティングによる撮影を行なうこととした。結果として、正面フラッシュと合わせて1ショットにつき5パターンの画像を収めることとなった。

なお筆者らは現在まで浮世絵のデジタル化に取り組んできているが、上記はそこで培ったライティング方法を応用したものである⁷。

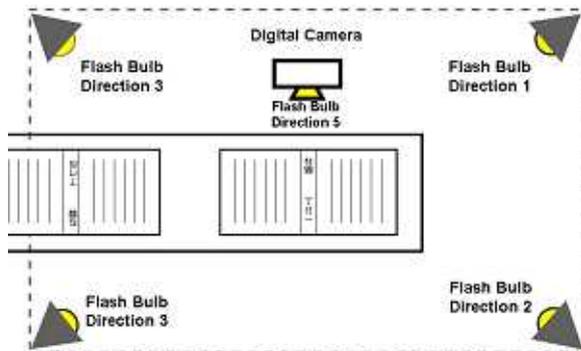


図4 版木デジタル化手法のイメージ図

6. データベース構築

上述の方法によってデジタル化を行なった版木資料をWeb上で共有するために、現在データベース構築を進めている。当データベースは2008年11月より立命館大学アート・リサーチセンターのサーバを利用して公開を開始している。

<http://www.arc.ritsumeai.ac.jp>(トップページの「デジタル・アーカイブの閲覧」よりアクセス)

メタ・データの構成は、自ずと版本書誌学上の整理項目に応じたデータを付与して公開する必要がある。しかし筆者らの本来の目的として、資料閲覧の困難さを克服する点があり、また版木の現存と所在を公にし、Web上で観察できる環境を整えることを優先し、ひとまず版木資料No.・版木グループNo.・書名・巻数・丁付・版木外形寸法・所蔵・旧蔵といった書誌学的には極めて限

定的な属性項目にのみデータを付けて公開している。また分割撮影・複数パターン撮影を行ったため、版木上の位置情報やライティングのパターン情報を示す項目を加え、ユーザが版木のどこを閲覧しているのか把握できるようにし、パターンを切り替えて閲覧できるようにした。他、書誌学的に必要となるその他の項目や備考・注記等については、研究メンバーが編集権限を持ち、web上で随時更新可能な設計とした。これにより、リアルタイムに最新の調査状況を公開できるようになった。

7. おわりに

扱いにくい資料である版木をデジタル化してweb上で共有し、調査データを蓄えてゆく仕組みを構築することには、ひとまず成功したと言える。しかし多くの課題が見えている。版木の観察は、版本との比較を行なうことに大きな意味がある。今後、現存の版木に対応する版本のデジタル・アーカイブを構築し、比較検討が行える態勢を整える必要がある。また4章でふれた例をみれば、研究用には蔵版記録の各記事を合わせて参照できるようにすることも必要であろう。出版文化研究に版木デジタル・アーカイブが存分に活用されるよう、今後さらなる充実を図りたい。

なお、より多くの方に版木の存在とその価値を知って頂くため、2008年度末に立命館大学アート・リサーチセンターにおいて、版木の展覧会を開催する予定である。

付記

本稿は、文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」および日本学術振興会平成20年度特別研究員奨励費による研究活動成果の一部である。また永井一彰氏は、本稿中に氏の研究成果を紹介することをご快諾下さった。記して深謝申し上げます。

¹ これら以外にも浮世絵(複製)の版木などが所蔵されており、継続して収集が行われている。

² 永井一彰「板木をめぐる - 『芭蕉翁発句集』の入木」(奈良大学総合研究所報8号, 2000.3, p.215-226)

³ 永井一彰「竹苞書楼の板木 - 狂詩集・狂文集を中心に」(奈良大学総合研究所報15号, 2007.3, p.182-206)

⁴ 水田紀久編『若竹集』上(竹苞叢書第1輯, 1975.8, 佐々木竹苞楼書店)所収

⁵ 浅川征一郎編『狂詩書目』(浅川征一郎編, 1999, 青裳堂)

⁶ 第3回版木研究会, 2008.7.18 於:立命館大学アート・リサーチセンター, 講師: 佐藤景三氏・中山誠人氏

⁷ 赤間亮・金子貴昭「浮世絵デジタル・アーカイブの現在」(人文科学とコンピュータ, CH-78, 2008.5, pp37-44)